

狭い道

キリストの時代、パレスチナの人々が住んでいた町々は、たいてい丘や山の上に巡らせた城壁の内側にありました。城壁の門は日没に閉じられますので、旅人たちはそれまでに町に着こうとすると、険しい上り道を急がねばなりませんでした。イエスさまは、その狭く骨の折れる上り道を、クリスチャンが歩む道の印象的な象徴とし用いられ、「狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこから入っていく者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く（→KJV：narrow＝狭い）それを見出す者はまれです」（マタイ7：13～14、新改訳）と説かれました。「いのちに至る門は小さく、その道は狭く」と表現されているクリスチャンの旅路について、主は、最終時代に生きる私たちに、ホワイト夫人にお与えになった“夢”をとおして、厳粛な教訓を示しておられます。

主がホワイト夫人にこの夢を与えられたのは、1868年8月で、ホワイト夫人がミシガン州バトルクリークにおられた時でした。その主から与えられた夢は、翌年の1869年1月12日版のレビュー・アンド・ヘラルド誌に「A Dream（夢）」というタイトルで掲載されました。

後にこの記事は、Testimonies For the Church（教会への証）第2巻に「Impressive Dream（印象深い夢）」という題で転載されています。

【註】Testimonies For the Church（教会への証）シリーズ（1～9巻）の日本語版は、現時点で第1巻までしか出版されていません。第2巻に掲載されているこの夢はわりあい長いので、ここでは意識して載せておきます。

「狭い道」の夢

Review & Herald 1869年1月12日、Testimonies For the Church 第2巻594～597頁より

夢は、ホワイト夫人が大勢の人たちと共に、沢山の荷物が積まれた荷馬車に乗って旅立つシーンから始まります。やがて道は段々と登り坂になって険しくなっていきます。山道の片側は断崖絶壁で、もう一方の側は岩が高くそびえ、表面が滑らかな白い岸壁になっています。旅人たちが進むにつれて道幅はどんどん狭くなっていき、これ以上荷馬車で旅を続けることは出来なくなったので、一団は馬を荷馬車から切り離して、積んでいた多くの荷物を捨てる決断をします。そこからは、わずかな荷物を馬の背にくくりつけ、彼らは馬に乗って旅を続けますが、道は益々狭くなってきます。人々は馬に乗ったまま断崖絶壁から落ちないようにするために、反対側の白い岸壁の方に寄り添うように進んでいくことを余儀なくさせられます。そうすると今度は、馬に乗せた荷物が岩壁にあたってしまうので、反動的に崖っぷちの方にもどしても寄ってしまいます。その場合、馬が道を踏み外して、馬もろともに断崖絶壁から転落して岩にぶち当たって砕け散ってしまう危険があるので、馬にくくりつけていたロープを切って、荷物を捨てることにしました。荷物にかけてあったロープを切ったとたん、荷物はすべて断崖から落下して散乱してしまいました。旅人たちは馬に乗ってさらに進みますが、いつバランスを崩して馬と共に転落してしまうかわからない恐怖に襲われます。その時です。彼らは、不思議な光景を目にします。“手”のようなものが現れて、馬の手綱を引いているのです！そして、その“手”は、馬を安全に誘導してくれるのです。それでも道は更に狭くなっていくため、もうこれ以上馬に乗って進むことは危険だと感じたので、彼らは馬から降り、一列になって前の人の足跡をたどりながら一步一步進んでいきます。そうしていると、またもや不思議な光景を目にします。今度は、白い岩壁の上の方から**細い紐**が垂れ下がってくるではありませんか！人々は、その紐をしっかりと握りしめながら前へ少しずつ進んでいきます。すると、紐も、彼らが前進すると共に前へと進みます。道は更に細くなっていくので、ついに彼らは履いていた靴や靴下をも脱ぎ捨て、裸足で歩き続けます。この時点で、それまで一緒だったある人たちの姿が、集団から消えていることに人々は気付きます。集団から消えて去っていたのは、窮乏や艱難辛苦に慣れていなかった人たちでした。残ったのは、どんな困難にも対応できることが身につけていた人たちだけでした。そこからの道幅は、なお一層狭くなってきたので、人々は白い岩壁に体を押し付けるように進んでいきます。そうしている内に、ついに山道は、足全体を道の上にとしっかりと置いて歩くことさえできなくなるほどに狭くなってきました。そのため、彼らは上から垂れている紐をしっかりと握りしめます。人々は口々に「私たちは

上から支えられている！私たちは上から支えられている！」と皆揃って叫びながら、紐に体重を預けて、一歩ずつ前へ進み続けます。すると、断崖絶壁の深い下の方から、飲めや歌えの大騒ぎをする騒々しい笑い声や音楽が聞こえてきます。それに伴って、激しく嘆き悲しむ苦悶の声々も聞こえてきます。人々は震えおののきながらも、足を踏み外さないように一歩ずつ前進していきます。すると、上からの紐が段々と太くなっていくのです。その時ホワイト夫人は、美しい白い岩壁に赤い血のしみが付いていることに気付きます。その白い岩壁に付いていた血のしみは、自分たちよりも先に、逆境に耐えながら同じ狭い山道を歩んでいった人たちの痛む足から滲み出た血だったのです。それを見た人々は、自分たちも彼らと同じ苦しみに耐えながら、さらに旅を続けることができると確信します。ついに山道は行き止まりになり、人々は大きな淵が横たわっている場所に辿りつきました。目の前にあるのは、人の体ほどに太くなった上から垂れ下がっている紐だけです。淵の向こう岸には、美しく光輝く緑の草原が見えます。まるで金や銀のように輝いている向こう岸へ渡るためには、目の前にある上から垂れ下がっている紐にしっかりとしがみついて、一気に淵を飛び越えるしかありません。ホワイト夫人のすぐ前にいた夫のジェームスの額からは、大粒の汗が流れ、首とこめかみの血管はいつもより二倍の太さに膨れています。彼の唇からは、抑えたうめき声が漏れているのが聞こえます。その恐ろしい場を前にして、ホワイト夫人の顔からも汗が流れ出て、それまで経験したこともないような激しい苦悩に襲われます。人々の間には、「もしこの紐が途中で切れてしまったらどうしよう。この紐は、いったい何に固定されているのだろうか？」という不安や悲壮感が漂い、彼らは深い淵を飛び越えるのを躊躇します。その時、後ろに続く人々の間で「神が紐を握っておられるのだ。私たちは恐れることなどない。私たちをここまで導いてこられた主は、決して私たちを見放されることはない！」という言葉が繰り返されます。そこでまず、夫のジェームスが太い紐を掴みます。そして、深い淵をいっきに飛び越え、美しい向こう岸に着きます。ホワイト夫人もすぐに続きます。すると、主を賛美する感謝と勝利の声々が聞こえてきて、彼女はとても幸せな気持ちに満たされます。そこで、ホワイト夫人は夢から覚めます。その時の気持ちをホワイト夫人は、困難で険しい道を進んでいく夢の中で経験した不安や恐怖のせいで、身体の全ての神経が震えているように感じたと感じています。そして、この夢の記述の最後は、「この夢には、何の説明もありません。この夢はあまりにも印象深かったので私の記憶が続く限り、この夢にあった全てのことが鮮明に残ることでしょう。」という言葉で終わっています。これが、主がホワイト夫人に与えられた「狭い道」の夢です。

ホワイト夫人が「この夢には、何の説明もありません。」と最後に記されているほどに、この夢は生きたまま再臨を迎える神の民が歩まねばならない旅路を示していて、段々と太くなっていく上からの“紐”は、神を全面的に信頼する**信仰**を象徴していることは明白です。そして、再臨に向けて忍耐強く「狭い道」を進む人々は、信仰を持ち続けながら神のお恵みによって旅を最後まで全うすることが、この夢をとおして約束されています。ここで注目したいのは、道が徐々に狭くなって危険や困難が増し、何らかの変化が強要される度に、逆境に耐えられない多くの人々の姿が消えていくという過程です。これは、再臨が近づくにつれて段々と激しくなっていく“ふるい”を表しています。私たちは、この“ふるい”から決して目を背けてはなりません。ここでの私たちへの主からの大切な教訓の一つは、**たとえ私たちが今現在“小さい門と狭い道”を選んで再臨に向けて歩んでいると思っても、主から目を離してしまうと、天の都への“狭い道”を行く旅路から脱落してしまう危険がある**ということです。

私たちは人類史の終焉にいます。せつかく主のお恵みと憐れみによって今日まで導いていただき、輝ける御国を目前にしているのに、主の民の一団から離れることを自ら選ぶならば、これほど残念で、悔んでも悔やみ切れないのではないのでしょうか！いつの時代にも、サタンが仕掛けた“ふるいの罠”に陥って脱落していった人々が多くいました。その中から、イエスさまの弟子だと称する人々の間で起きた“ふるい”から、貴重な教訓を学んでおきましょう。

出典・参考：聖書研究ミシガン 第5部「三重の光」前半 橋川真理
『三天使の使命』第5部・前半「狭い道の夢」

